

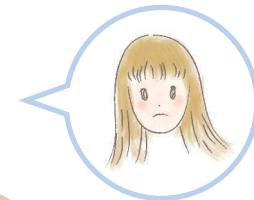
はじめて聞く、古典芸能の扉①

「能を2倍楽しむ法」



ほんと、つまらなかったー。

明かりは暗いし、動きはほとんど無いみたいだし、セリフはさっぱりわからない。
いったい何を見たのかしら。



■ それは楽しみ方を学ばずしていきなり観たからじゃ。



■ あなたはだあれ？

■ うーむ、私は能と狂言の魅力をあんないする和阿弥でござる。

確かに能は多くの現代人の目には退屈な芸能に映るかもしれないが、どうしてどうして
知れば知るほど面白いものなのじゃよ。

■ だって、前もって知識がなければわからないなんてオカシイわ。

演劇は誰が見ても分かりやすくて感動できるものが優れているんじゃない？

■ ソフィちゃん、文化は多様。違いがあるから楽しめる。

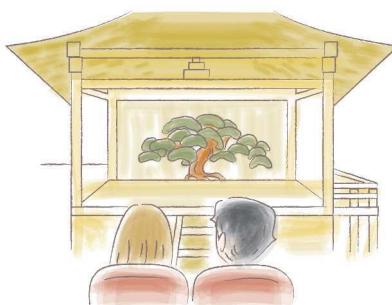
■ そうかなあ。

■ では能を楽しむ方法を教えましょう。

やろうとすることすべてを表現するのではなく、100%を言ってしまわない、やってしまわないところが
能の表現方法、ともいえるのじゃ。

■ え？ どういうこと？

■ 例えば悲しい気持ちを表すとき、身振り、手振り、手を目の傍に持つて行ってごしごしやる、これが分かりやすい表現かも
しれない。でも悲しいという気持ちの中には、悔しさかもしれない、後悔かもしれない、痛みかもしれないいろいろな要素
があるはず。それを観る側が想像して共有すると、見てごらん、能面がいきなり表情を持つような気がしないかな。



■ 和阿弥さんは血の涙をながしているようだ、と言ってたけど、
私にはあの人は涙をじっとこらえているみたいに見えるわ。

■ それでいいのじゃ。演者と観客の思いが一緒になって交じりあって、
はじめて一つの作品が成り立つというイメージ。

だから演目の主題とあらすじをあらかじめ理解しておくことは、
とっても大切な鑑賞法なのじゃよ。

■ あらすじを知った上で、見る側はさまざまに想像してもかまわないのね。

もしかしたら同じ舞台でも私と和阿弥さんとでは違うものを見ているかもしれないわね。すごく自由ね。

■ 同じ演目、という点でいえば流派によって表現に微妙な違いがあるのも面白い。

慣れてきたらそこにも注目してみたらどうだろう。有名な「道成寺」で僧が鐘の中に入る場面でも
流派によっては身体をひねって飛び込んだりすることもあり、そのタイミングも見どころのひとつじゃな。

ぜひ両方見比べてみたいわ。同じように思える能にも流派があるのね。

観阿弥、世阿弥のあとに大きく分けると京都で根付いた「上がり」と奈良の「下がり」と二つの流れがある。下がりの方は、世阿弥から受けた禅の思想に加えて武士の表現意識も反映していると言われておるな。それぞれの家に何代も伝わった能面もあるのじゃよ。

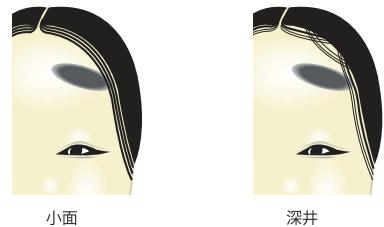
能面って動かないとわかっているのに時々笑ってるように感じられるのはなぜ？



面に光を受けるようにややうわむきの「てらす」、下向きの「くもらす」、ササッと左右に動かす「キル」という演技の技術と、ほら、さっき言っていた観る側の想像力、それが合わさる瞬間に、まるで生きている人物のような表情が生み出されるのじゃな。

女人の面にもいろいろあるのね。

年齢をあらわすに見分けやすいのは髪の描き方。
前髪の本数や別れかたなどで若い女性と中年の女性とを区別していたりする。
小面、深井という代表的なものでいちど見比べてごらん。



知らなかった。こんなこと、誰が考えついたのかしら。

歌もあらためて静かに聞いてみると迫力の響きが伝わってくるわね。

シテ、ワキの朗々とした謡、地謡のハーモニー、どちらも男声の魅力がいかんなく發揮される独特の芸能じゃな。
囃子の音色はどうかな。

笛、小鼓、大鼓、太鼓の四拍子ね。

コレ、今、笛の次に何と言った？

こづつみ、おおづつみ…

違う、違う、こづつみ、おおづつみ、じゃ。間違えやすいので気をつけて。

あは！ほんと、今まで何となく「づつみ」と言ってしまっていたわ。気を付けます。

今度は一場面だけだが、同じテーマを能と歌舞伎の舞台で見比べてみようか。

同じような内容で歌舞伎になっているものもあるの？

そう。古くから伝わる話や有名なエピソードなどを典拠に、それを脚色して能が創られ、さらに後世の文芸にも展開していく例はたくさんある。特に歌舞伎という同じ舞台芸能と見比べると、能の本質がはっきり見えてきたりして、楽しいものじゃ。

これは、鬼界ヶ島で有名な「俊寛僧都」の物語。取り残された俊寛が去っていく船を見ながら文字通り足摺りする場面を取り出してみようか。

平家物語にある「足摺」は読んだことがあるわ。

ほんと!歌舞伎は動作も演出も派手で分かりやすい。能は激しい気持ちを表すはずなのにセリフもゆっくりで動作も大きくなないわね。でもそれだけに心持ちの深さや悲しさがぐっと込められているみたい。同じような気持ちを体験している人だったら能の方が泣けると思う。物語演出としての面白さよりも、そぞろ落とされた表現の中でテーマを光らせているわ。



能にちょっとハマってきたかな、ソフィちゃん。では次は能とは切っても切れない関係の「狂言」の世界へ案内しようか。



能の楽しみ方 14

- 主題とあらすじを理解して見る。
- 見どころのポイントをわきまえ、意識して見る。
- シテ・ワキの朗々とした謡の声の響きを楽しむ。
- 男声合唱としての地謡の響きとハーモニーを楽しむ。
- 優雅な舞の美しさを楽しみつつ、動きの一挙手一投足に注意して見る。
- 風雅な囃子の音色を楽しむ。
- 能面の種類と微妙な造りに注目して見る。
- 能装束の種類と色の美しさ、細かなデザインに注目して見る。
- 小書き演出のバリエーションを楽しむ。
- 後見の瞬間的な動きを見逃さないようにする。
- 間狂言のせりふに耳を傾けて、物語のあらすじや主題を確認する。
- 本説(典拠)を知り、能としての脚色を意識して見る。
- 歌舞伎等、後世の文芸ジャンルに展開した作品との比較を楽しむ。
- それぞれの曲の面白さを独自に発見して楽しむ。

知っているとさらに楽しさ深まります。

プラスアルファ

- “せぬ隙” 世阿弥自身の本音が書かれているといわれる『花鏡』にある言葉。
【関連】 「抑制と捨象」(林和利)
- 捕巣寺 奈良にある禅寺で世阿弥の菩提寺
- 「不立文字」 禅語